

ニーチェをめぐる女性たち — ニーチェの女性観の背景 — (II)

恒 吉 良 隆

III 妹エリーザベト・フェルスター=ニーチェ

1) はじめに

フリードリヒ・ニーチェ (1844—1900) の2歳年下の妹エリーザベト (1846—1935) は、ニーチェの身辺にあった女性たちのなかでも、ニーチェの生涯ならびにニーチェの思想伝播に最も深い関わり合いをもった人物である。この「議論の余地のある非凡な女性」¹⁾は、ただ単に身内として多くの生活空間を共にしたというに留らず、ニーチェの全生涯に複雑にからみ合い、ある意味でニーチェの命運そのものを大きく左右することになった。当然のことながら、ニーチェの「女性観」にも、少なからず蔭を落としていると考えられる。

本稿の第一の眼目は、わが国では論じられることの少ないこのエリーザベト・フェルスター=ニーチェを取りあげて、最新の研究動向を踏まえつつその人物像、特に兄妹間の関係を探ることにある。そして第二の眼目は、本誌前号 (第66号) で言及したようなニーチェの女性批判の言辞や反フェミニズム的な見解の背後には、大なり小なりこの妹の存在がからんではないか、ということを示唆することにある、そして第三に、ニーチェの女性観といわれるものの根底にあるものに照明を当てることにある。

実のところ、兄妹間の確執が深まり始めた1870年代の末頃から、ニーチェは妹 (および母親フランツィスカ) との対立と和解を繰り返しながら、その後次第に妹嫌悪・妹憎悪の感情をむき出しにすることが多くなっていった。『この人を見よ』の中に綴られている次の一節など、その典型的な攻撃文のひとつであろう。「私に対して最も対立している存在、そして、どうしようもない本能の俗悪さを探しあてようとするれば、それはいつの場合にも私の母と妹である——こういう下種な人間と血縁で結ばれていると考えただけでも、それは私の崇高さ

に対する冒瀆というものであろう。』²⁾

* * *

* * *

エリーザベトは幼い頃から兄フリードリヒをたいへん敬愛し、かたや兄のほうも妹エリーザベトを可愛がって、二人は「異常なまでに親密な関係」³⁾と言われるほどに、まれにみる兄妹愛に包まれていた。長じてのち、ニーチェ(24歳)がバーゼル大学教授に就任するや、妹は遠路たびたび兄の元に赴いて、バーゼルの地に長期滞在をしながら、病弱で世知に疎い兄のために甲斐甲斐しくハウスキーパー役、秘書役、介護役を果たした。なにしろ、彼女のバーゼル滞在の延べ日数は、足かけ9年間で約3年半にも相当する。ところが、そのような両者の「蜜月」関係にはその後、もろもろの事由により(後に詳述する)決定的な亀裂が生じることになった。兄妹としての情愛は残しつつも、兄の妹に対する悲憤慷慨はことあるごとに高まり、ニーチェは友人宛ての書簡に妹に対する憎しみに満ちた言葉を連ねるようになる。結局、ニーチェの発狂という事態によって、兄妹間のさまざまな思念や見解の齟齬は、修復の機会をみないまま終焉を迎えた。

ところで、ニーチェが精神の闇の中をさ迷うことになってまもない1890年代半ば頃、それまで殆ど反響らしきものさえなかったニーチェの思想が、一躍にして巷間の関心を集めるようになった。エリーザベトは、南米パラグアイでの植民地開拓事業の失敗と夫ベルンハルト・フェルスターの死という逆境にありながら、ドイツへ帰国するやすぐに、ニーチェ哲学喧伝のための「ニーチェ運動」(Nietzsche-Bewegung)を押し進める。すなわち、ニーチェ全集およびニーチェ書簡集の編纂、ニーチェ評伝やニーチェ論考の執筆、そして、散在する膨大な数のニーチェ文献資料の収集、「ニーチェ資料館」の設置と運営、ニーチェに関する講演会・朗読会・晩餐会などの開催等々、まさに八面六臂の精力的な活動が続け、その後の「ニーチェ流行」の基盤ならびに「ニーチェ学」の基礎をつくりあげた。しかしその一方で、それらの多大な功績とはまったく裏腹に、エリーザベトは自らの思い描く「ニーチェ伝説」の醸成を意図しながら、秘かにニーチェ原典の改ざんや隠匿、ニーチェ書簡の偽造などに手を染めた。さらには、ヒトラーをはじめ時の権力者たちに媚びを売って、ニーチェを通俗化・祭式化し、「主戦論者」(Bellizist)に仕立てあげた。それらもろもろの意味で、エリーザベトはニーチェ思想の歪曲という局面に、大きく加担することになった。

彼女の犯したそのような数々の歴史的罪過に対しては、その後(主に第二次世界大戦後)ニーチェ研究者たちのあいだから、エリーザベトの「知的誠実さという点における著しい欠陥」⁴⁾(Karl Schlechta)が声高に非難され、エリー

ザベトは従来から今日に至るまで厳しい批判の対象となり、「ドイツ精神史におけるネガティブな評価」⁵⁾を受けている。

そのようななかであって、最近エリーザベトに関する著書や論文の公刊が目立って多くなっていることは注目に値する。なかでも、たとえば L. F. Pusch 編『著名人の妹たち』(1985年)にエリーザベト論を展開している Klaus Goch や、『ニーチェの妹と力への意志—エリーザベト・フェルスター=ニーチェ評伝』(2001年)を著した Carol Diethe などの論調には、エリーザベトをある観点から肯定的に捉えようとする動きさえ認められる。つまり、このエリーザベトの果敢な生き方に注目して、女性がいまだ社会の埋もれた存在であった時代に男性顔負けの活躍を続けたこの「ヨーロッパにおける第一級の女性」(エリーザベト死去の折の新聞評)に、「解放された女」の先駆けを見届けようとする傾向である。エリーザベト論における一つの風穴として注目に値すると思われるので、以下の論述においても、この点についての言及は欠かすことができないであろう。

さて、ニーチェの全体像を捉えようとする場合においても、また、本論の当面の問題であるニーチェの女性論に関する考察の場合にあっても、いずれにせよ極めて存在感のあるこのエリーザベトという人物の脇を素通りすることは許されることではない。そう言えば、H. F. Peters はいみじくもその点について次のように述べている。「ニーチェの生涯と妹エリーザベトの生涯はきわめて密接にからみ合っているので、いずれか一方を無視して、他の一方を論じるなどということはとうてい不可能である」⁶⁾、と。

また、『忘れ去られた祖国——ニーチェの妹エリーザベト=ニーチェの足跡』(1994年)の著者 Ben Macintyre も、次のようにエリーザベトにもっと照明が当てられるべきであることを強調している。「ニーチェについて書かれた書物の数は、おそらく現代のいずれの思想家をも上回わり、しかも錯綜したものになっている点でも随一であろう。(中略)これに反し、妹エリーザベトのほうは、さまざまな点でむしろニーチェ以上に注目に値する生涯を送ったにもかかわらず、たいていの場合邪険な扱いを受け、脚注の片隅や歴史の下草の中に覆い隠されたままである。(中略)確かにエリーザベトは兄を有名にもしたが、悪評高い者にもした。ニーチェの名は、彼女が加担することによってナチズムと結びつけられるようになった。しかし彼女の人生はそれ自体として眺めても、啓発的である。彼女の価値観は、人類の歴史においても最も暗い時代のひとつを予示するものであったが、彼女はヨーロッパ屈指の文人として、40年あまりにわたって名声をほしいままにした。コージマ・ヴァーグナーを別にすれば、戦前のドイツ文化圏において彼女ほど賞賛された女性はいなかった。」⁷⁾

確かに、エリーザベトはニーチェ原典資料の「聖堂」に長年にわたって君臨し、ニーチェを言わば「独り占め」しながら、ニーチェ哲学を民族精神高揚の具とすることに加担した。ナチスの政権掌握2年後の1935年に90歳を目の前にして大往生したが、晩年にはイエーナ大学より名誉文学博士号を授与されたり、三度にわたってノーベル文学賞候補者に推挙されるなど、時の人としての権勢をふるった。エリーザベトの死去に際して、ドイツの新聞・雑誌はこぞって彼女を〈不撓不屈のドイツ精神唱導者〉として賞賛し、また、ドイツ総統ヒトラーはエリーザベトの葬儀に私人の立場で参列して、自らその棺に月桂樹の花輪を供えた、という。

2) 兄の尊崇者・協力者としてのエリーザベト

エリーザベト(愛称リースヒェン、リースベツト)は、幼少の頃から兄フリードリヒ(愛称フリッツ)にとって、またとない遊び相手、話し相手であった。内向的で孤独な少年であったフリッツは、親しい友だちもないに等しく、二人は遊ぶときも本を読むときも、木陰に寝そべるときも、いつも一緒だった。仲のいい二人は家族の者たちに向かって、「僕たち大きくなったら、結婚するんだよ」⁸⁾などと口にして、失笑を買うほどだった。

リースヒェンは兄フリッツを心から敬愛して、何事につけつねに兄を頼りにした。父親と早く死別(フリッツ4歳9か月、リースヒェン3歳のとき)したことから、エリーザベトの兄に対する態度を「父親代償」と解する研究者もいるが⁹⁾、それはともかく、フリッツのほうも妹をよく可愛がり、読書の手ほどきをしてやったり、教師ぶって宿題をみてやったりした。リースヒェンは兄の言うことなら、母親や伯母たちの忠言以上に、従順に耳を傾けることが多かった。たとえば、級友たちとの議論の際にも、妹は俊秀の兄のことをひけらかし、その威を借りることがたびたびであった。エリーザベト著『若き日のニーチェ』(1912年)によれば、「幼い頃から兄は私にとって第一級の権威であった。だから私がヘラクレイトスの弟子たちと同じように、彼ガソウ言ッタ(私の翻訳では、フリッツがそう言った、となるのだが)という言葉を発することによって、一切の議論の決着がついた」¹⁰⁾、といわれる。

兄フリッツを尊敬するがゆえに、妹リースヒェンは、幼いときから兄の書きくずしの原稿などをせっせと収集する習慣があった。兄からはときどきその行為をからかわれながらも、彼女は機会あるごとに兄の書いた作文やエッセイ、詩、楽譜などを、後生大事に自分の「宝物入れ」(Schatzkammer)に収蔵した。(ちなみに、ニーチェ若年の頃の遺稿が「ほぼ完璧なほど」¹¹⁾大量に残されているのは、何よりもこの妹のおかげである。なお、エリーザベトの几帳面なこの

習癖は、後年「ニーチェ資料館」を舞台にしたニーチェ資料収集において、遺憾なく発揮された。）

兄に対して全幅の信頼を寄せていたリースヒェンであったが、しかしその一方で、彼女には負けず嫌いで強情っ張りな一面があった。兄も辟易するほどの頑迷さが、すでに早くから認められた。エリーザベトは上記のニーチェ評伝において、次のような逸話を披露している。——7歳少し前の幼いリースヒェンは、一般に幼児がそうであるように、コウノトリが赤ん坊を運んでくるのだと信じ込んでいた。その点について兄フリッツが、「コウノトリだなんて馬鹿なことを言っちゃだめだよ。人間は哺乳動物なのだから、それ自体が子供を産むんだよ」と教えると、リースヒェンは目をつり上げて、ママもロザリーエ伯母さんもそう言った、絵本にもそう書いてあった、などと意固地になって言い張った。フリッツはついに根負けして、「間抜けなやつだ」とつぶやきながら、その場を立ち去るしかなかった、とのことである¹²⁾。

また、些細なことから二人がつかみ合いのけんかになったあるとき、負けそうになったリースヒェンは、兄につばを吐きかけて抵抗をした。実は、このことがあって、フリッツは妹に「ラーマ」というあだ名を献上したらしい¹³⁾。それというのも、フリッツはある博物誌の本に次のような記述があったことを思い出したからである。「ラーマは奇妙な動物である。どんな重い荷物でも嫌がらずに担ごうとする。ところが、強制したり扱い方がまずいと、餌を摂るのを拒み、塵埃の中に横たわって死のうとする。」¹⁴⁾「ラーマは歩き続けたくないときは、振り向きざま騎乗者の顔めがけて悪臭のする唾液を吐きかける。」¹⁵⁾——ふだんは愛らしく素直な女の子でありながら、いったん自分の気に入らないことがあると、激しい気性を露にするリースヒェンに、兄フリッツは皮肉を込めて「ラーマ」という呼び名をつけ、生涯にわたって「わが愛するラーマ」、「わが忠実なるラーマ」などと愛用した。妹自身はそのような呼称を最初のうちこそ嫌がっていたものの、次第にこれを「名誉あるあだ名」と受けとめていたようである¹⁶⁾。

エリーザベトのこれらの幼い頃の性格は、彼女がその後の人生において発揮した自主独立の気概や「ニーチェ運動」におけるあのしたたかさと辣腕ぶりにそのまま相通ずるものがある。

リースヒェンは6歳のときから15歳になるまで、パラスキ女史創立の私立女子小学校に通った。このパラスキ学校においては、中流階級の子女たちが、読み・書き・算術を中心に宗教・歴史・理科・図画・唱歌、そして少々フランス語を学んだが、なかでも教育の主眼は、「上流社会の礼儀作法」に置かれていた。リースヒェンは、「快活な生徒で頭の回転が早く」、どの教科においても抜きんできた成績を収めた¹⁷⁾。

パラスキ学校を卒業後、エリーザベトは1862年2月から9月までの約半年間、ザクセン州の州都であるドレースデンの全寮制女学校で学んだ。この学校は、若い淑女の養成を目標にした、いわゆる花嫁学校であって、その教育内容は決してエリーザベトの知性と学習意欲を満足させるものではなかったが、彼女にとっては、故郷を離れて暮らす寄宿生活それ自体が開放的・刺激的で、そのうえ都会生活の楽しみをあれこれ享受することができた。入学して間もない同年3月1日、彼女は兄フリッツ（すでに1858年から全寮制のギムナージウムであるプフォルタ学院に在学していた）に、次のような便りを書き送っている。「私はいま、ロス伯爵令嬢とダンスの教習を受けているのですよ。その人は、あなたの可愛い妹にとっても親切にしてくれます。こんな高貴な人と私が上首尾に交際できるなんて、兄さんは思ってもみなかったことでしょう。（中略）私がナウムブルクに帰ったときは、あの無作法な小娘がすっかり社交的なレディーになっているので、兄さんきっとびっくりするでしょうよ。」¹⁸⁾——なお、エリーザベトはその手紙の追伸に、復活祭の休暇に自分を来訪してくれるならばとても嬉しいのに、という一文を書き添えた。

ニーチェは妹の願いを聞き入れて、復活祭の折に二週間ドレースデンを訪れた。ニーチェ兄妹は仲睦まじく、まるで「婚約中の若いカップルのように」¹⁹⁾ 互いに腕を組んでツヴィンガー宮殿の美術館を訪ねたり、エルベ河でボート遊びをしたりした。

エリーザベト（16歳）はその年の9月にはこの女学校を修了して、しぶしぶ故郷のナウムブルクに帰ったが、因習に縛られた田舎町での生活は、自由で華やかだあのドレースデン暮らしに比べて退屈であった。それにも増して、母親フランツィスカの何かとうるさいしつけと苦言、そして、押しつけがましい結婚話には反発を感じざるをえなかった。帰郷後、エリーザベトは教会活動の一環として、聖歌隊合唱団の一員に加わり、アフリカ宣教基金の募金集めをしたり、また、フランス語・英語・イタリア語の個人レッスンを受けたりしたが、彼女の気分は晴れず、満たされない気持ちは高じる一方で、この頃のエリーザベトには思春期特有の精神の動揺が顕著である。そういえば、すでに女学校在学中の日記（1862年5月1日）にも、次のように「生の不安」(Daseinsangst)を訴える一節が認められる。「…人生に対して私は何を期待すればいいのか。何一つ当てもない。（中略）しかし、このことは私の汲めども尽きない一生の課題であり、もちろん熟慮を要する課題である。」²⁰⁾ (傍点筆者)。そのあとに続けて、自分の結婚問題についても触れ、「私は結婚なんてしないだろう」、と書き付けている。

エリーザベトは18歳のとき、おそらく兄の勧めに従ってショーペンハウアー

の哲学小品集『余録と補遺』(1851年)を読んだとみられる。そのなかに書かれていた、人生とは因果関係の連鎖にほかならない、という趣旨の一文が特に印象的であつたらしく、その文句を援用しつつ、妹(22歳)は兄フリッツに宛てて次のような便りを書いた。「あの因果関係の連鎖がもしも私の場合、〈オールドミス〉という結果に終わろうとも(そのような気がしてなりません。それというのも、私は心の内の必然性に促されて、実は三人の立派な求婚者を拒絶したのです)、ねえ愛するフリッツ、どうか私のことを悪く思わないでね。そして、私が年をとっても、どうか私を愛し続けてね。」²¹⁾(1868年7月13日付)。——確かに、後年においてもニーチェは妹思いの兄であり続けた。ただし、後述するように、彼が次第に妹に対して怨念にも似た嫌悪感を抱く瞬間が多くなっていったことに変わりはない。

ところでKlaus Gochの論述によれば、「むろんエリーザベトはく玉の輿に乗れる女性」であつた。〈愛らしく、快活で、家計の切り盛りが上手にでき、料理の腕前も見事で、そのうえ多少の資産もあつた〉。ナウムブルクで一番有名なフェスティバルホールである〈静養館〉で催される夏祭りや冬の舞踏会では、彼女は陸軍少尉や上級公務員の研修生・幹部候補生たちにとっての〈おめあての〉花嫁候補であつた。²²⁾しかし、エリーザベトは母親の切なる願いを無視して、彼女に言い寄る結婚志願者たちに拒否の態度を取り続けた。

なにしろ、当時、女性は一信札(ふつう14歳くらいのときに受ける)を済ませば、できるかぎり早く結婚して、夫や自分の家族のためにわが身を捧げることこそ、女性の唯一の幸福であるとされた。(現に、母親フランツィスカも、またフランツィスカの祖母も、17歳のときに結婚している。)この時代の女性には、ギムナジウムへの進学道も閉ざされており、従つてまた、大学で学ぶことも不可能であつた。プロイセンで女性の大学入学が認められたのは、それからおよそ40年あまりのちの1908年のことである。

ちなみに、その当時、女子教育の手引き書として広く読まれていたKarl von Raumerの著書『女子教育』(1853年初版)には、次のような記述が見受けられる。すなわち、「女の子は、母親の家事を手伝うように教育すべきであり、また、性的成熟後は(つまり一信札を済ませたのちは)ひたすら家庭内の責務に専心するよう、しつけなければならない」、としたうえで、さらに女性と学問の問題に触れ、「女子の場合、教育が学問の領域まで展開されてはならない。さもなくば、女子教育が情愛のこもった教育でなくなるからである。女子は学問の世界に、他の一切を忘れるほど頑強な男性的忍耐強さで沈潜できないし、また、実際そうしてはならないのである。(中略)なぜならば、女子には男性のような体力と能力が欠如しているからである。」²³⁾

エリーザベトが最晩年に書き残した『ニーチェと当時の女性たち』(1935年)によれば、当時のうら若き乙女たちのあいだでは、シューマンの連作歌曲(シャミッソー作詞)「女の愛と生涯」(Frauenliebe und -leben)が特に愛好されていたという。今日的な視点から眺めるならば、明らかに女性蔑視の、この絶対的な男性賛美の曲を、乙女たちはうっとりしながら口ずさんだという。ひたすら献身的な愛に生きる女の生涯を、詩情たっぷり荘重に謳いあげたこの歌曲は、その当時女性が辿るべき生涯の、いわば「詩的表現による模範のお手本」であった、とエリーザベトは指摘している²⁴⁾。

先述したとおり、しかしエリーザベトはそのような一般的な社会通念に逆らうように、むしろ未婚であることにも平然として、兄との精神的交流を心の支えとしつつ、自己の歩むべき道、「汲めども尽きない一生の課題」を絶えず手探りしていたと考えられる。エリーザベトのこのような結婚回避の姿勢が、兄フリードリヒの結婚に関する懐疑的見解に影響されたものかどうかについては、むろん明らかではない。ただ、幼い頃からの兄に対する強い思慕の念が、無意識のうちに兄以外の男性に対する関わり合いを妨げたということはあることである。

その間、兄フリードリヒは着々と学問の世界において地歩を築きつつあった。1869年には、24歳という異例の若さでバーゼル大学の員外教授(翌年には正式に教授になった)に就任した。就任に先立って、彼は恩師リッチュル教授から学術雑誌『ライン文献学誌』(全24巻)の総索引を作成するように命じられたが、ニーチェはこのとき妹エリーザベトにその仕事の手伝いを依頼した。この辛気臭い難儀な作業を、エリーザベトは一か月以上にわたって凡念に遂行した。Luise Marelleによれば²⁵⁾、妹エリーザベトの「華奢な指と生来の几帳面さ」は、「はさみと糊で索引項目をアルファベット順に並べ換える作業」にはうってつけであった。エリーザベトは驚くべき集中力と手際の良さを発揮して、請われた任務を見事に果たしたという。幼い頃から兄を尊敬し、いわば偶像視していたエリーザベトにとっては、兄が没入している学問世界において自ら協力できたこと自体、おそらく大きな喜びであったと考えられ、彼女にとってこれは「青春時代の最も幸せな思い出」²⁶⁾となった。なお、兄フリードリヒはバーゼル大学において「ホメロスの人格について」と題する就任講演を行ったが、その講演原稿に表紙をつけて、「わが愛するただ一人の妹である、文献学の刈り株畑の忠実な協力者エリーザベトに」と献辞を添えて、妹宛てに送り届けた。

妹のこの献身的な精励に対するいわば褒美として、ニーチェは妹に、ライプツィヒ大学の聴講生として学籍登録することを提案した。喜んで同意したエリーザベト(23歳)は翌1870年の3月から約半年間、好奇心をもって講義に臨

んだが、大学での修学は大きな成果もないまま短期間で切りあげられた。止宿先のビーダマン教授夫妻（かつてニーチェが学生時代にお世話になった）との折り合いが悪かったからだとされるが、それよりも「兄フリードリヒのいないライプツィヒなど、もはや魅力がなかった」²⁷⁾ からかもしれない。こうして、「故郷ナウムブルクにおける偏狭さと拘束から逃れようとする彼女の最初の試みは失敗に終わらざるをえなかった。」²⁸⁾

ところが、そのような彼女の眼前に、一条の希望の光が差し込む。バーゼル大学に赴任した兄から、来訪を懇請する連絡が来たのである。ニーチェはもともと世知に疎く、所帯の切り盛り（特に金銭を扱うこと）が不得手であった。そのうえ、大学就任後たえず偏頭痛や胃けいれんなど、体調不良に悩まされていた。不眠症も続き、強力な睡眠薬まで服用したが殆ど効果がなく、悩める兄は、「わが忠実なるラーマ」に頼るしかなかった。

エリーザベトは、その後長年にわたって（1870年には4か月間、1871年には半年以上、1872年と73年にはそれぞれ3～4か月間、1874年と75年には大学の夏期休暇のあいだ、そして、1875年8月から翌1876年3月までの7か月間）、足繁く故郷ナウムブルクから遠路はるばるスイスのバーゼルへ馳せ参じ、「敬愛するフリッツ」(Herzensfritz) のために、せっせと家政婦役、秘書役、介護役、あるいは、カウンセラー役を務めた。家計簿の管理、炊事、洗濯、散歩の相手、病気の看護はいうまでもなく、さまざまな雑用を喜んで引き受けた。それらのことと並んで、エリーザベトの重要な役割は、兄の話に耳を傾けてやることであり、対話の相手を務めることであったと考えられる。ニーチェはあるとき、書きあげたばかりの『悲劇の誕生』の草稿を妹の前で朗読したこともあった。このようなとき、才気走ったエリーザベトのことゆえ、彼女が自らの感想を述べたり、兄の考えに反論して議論になったことも容易に推測できる。いずれにせよ、この時期のエリーザベトが兄にとって「いつでも進んで自らを提供する共鳴板であり、信頼の厚い弟子であり、あらゆる生活上の困難に手を差し伸べる実質的な援助者」²⁹⁾ の役を果たしたであろうことは、疑う余地がない。

ニーチェは1875年に友人ゲルスドルフ宛に、妹との共同生活について次のように伝えている。「そういうわけで、僕は妹の協力を得て一家を構えることができた。万事うまくいっている。こうして僕は13歳のとき以来(筆者注：ニーチェが全寮制のギムナジウム入学のため故郷を離れて以来、という意味)、ついに再度気のおけない環境を取り戻した。(中略)僕たちのような者は、どうしても自分の城を持つことが必要だよね。(中略)僕は、僕と一番気の合った妹という喜ばしい存在のおかげで、たぶん他の多くの人々よりはるかに果報者だよね。」³⁰⁾

このような、ニーチェ兄妹のいわば水入らずの共同生活を、Henry W. Brann は「ある種の連帯感情」³¹⁾ (ein gewisses Zusammengehörigkeitsgefühl) に支えられたものだと言い、Klaus Goch は比喩的な表現を使って「一種の兄妹婚」³²⁾ (eine Art Geschwister-Ehe) と評している。後述するエリーザベトの小説草稿「ノラについての茶飲み話」(Carol Diethe による仮題)の背景も、多くがこのバーゼル時代の兄妹愛がその下敷きになっていると考えられる。

3) エリーザベトの自立への道と兄妹の疎隔

エリーザベトがバーゼルに出向いて兄に献身的な助力をした1870年から78年といえば、彼女の年齢は当時としてはすでに適齢期を過ぎた24歳から32歳の時期にあたる。エリーザベトは母親からの度重なる結婚話にも耳を借さず、ひたすら兄に仕えることで満足し、自分自身の人生の船出を再三にわたり先送りしていた³³⁾。

しかし、エリーザベトにとってこのバーゼル滞在は、必ずしもただ単に自己犠牲に甘んじた生活であったとは限らない。なにしろ、著名な少壮教授の妹として、エリーザベトは周辺の人々から厚遇を受け、名声ある人々と知り合う機会も多かった。バーゼルでの生活は、ナウムブルクとは比べものにならないほど変化の多い、充実した日々であったことは間違いない。

エリーザベトは1870年7月末、兄に伴われて初めてリヒャルト・ヴァーグナーとコージマ・フォン・ビェロー（二人はその1か月後に正式に結婚）を訪れた。「自由恋愛」と称して同棲生活を営むこの二人の貴族的な生活スタイルに、エリーザベトは大いに驚嘆させられた。面識を得てから数年後の1875年2月にエリーザベトは、ヴァーグナー夫妻が演奏旅行で1か月あまりトリープシェンの館を離れるあいだ、夫妻の子供たちの代母の役を依頼された。子供たちの世話ばかりでなく、ヴァーグナー家の大がかりな所帯の切り盛りも任されたが、この時のエリーザベトの万事遺漏のない果敢なまでの働きぶりは、その後コージマとエリーザベトのあいだに厚い信頼関係を生むことになる。互いに du で呼び合うことを許され、エリーザベトは「バイロイト・サークル」の一員に招き入れられて、彼女が心秘かに憧れていた上流階級の人々との交際も現実のものとなった。あるときは(1879年)、バイエルン国王ルートヴィヒ二世のためだけに上演されたヴァーグナーの『ラインの黄金』の観劇に、エリーザベトは「ヴァーグナーの随行者」の一人として、その場における列席を許されたという³⁴⁾。そのような信望を得た彼女は、バイロイト祝祭劇の折にも、その華やいた雰囲気の中で、若いヴァーグネリアンたちの「花形」としてもてはやされた。エリーザベトがやがて意気投合し、結婚して、南米パラグアイの地で共に植民

地開拓事業に取り組んだベルンハルト・フェルスターも、そのような熱烈なヴァーグナー崇拜者の一人であった。(詳細については後述)

これに対し、周知のようにニーチェはあれほど傾倒していたヴァーグナー芸術に次第に疑念を深め、1878年5月に出版した『人間的な、あまりに人間的な』は、ついにヴァーグナー思想圏との決別の書となった。同年6月末には、長年にわたって断続的に続けられたエリーザベトとの共同生活も、「たびたびの、涙ながらの議論の末に」³⁵⁾ ついに解消して、さらに翌1879年には、十年間勤めたバーゼル大学の教授職を病状悪化を理由に辞任するに至った。(その後は、精神錯乱に陥る1889年1月までずっと、スイス・イタリア・南仏などを転々とする生活を送った。)

ニーチェ兄妹が、長年の共同生活を解消したことの背景としては、さまざまな理由が考えられよう。ちなみに、『人間的な』の中には、次のような暗示的な箴言が認められる。

「あまり接近しすぎて。——われわれがある人間とあまりに接近して一緒に生活すると、われわれの身には、優れた銅版画を繰り返し素手でつかむのと同様のことが起こる。(中略)そして、往々にしてわが人生の真珠をもそれとともに失ってしまうものだ。」³⁶⁾

「黄金の揺りかご。——自由精神の持主は、女たちが身の回りを世話する母親めいた配慮と注意を振り払おうとようやく決心するや、いつも安緒の息をつくであろう。(中略)彼の身の辺の女たちの母親めいた気持ちが与える乳は、彼にとっては容易に胆汁に変わりうるのである。」³⁷⁾

「自由精神の持主と結婚。——自由精神の持主は女性と共に生活するであろうか？私は一般的に信じているのであるが、自由精神の持主は古代の予言鳥と同様に、現代の真実を考える者、真実を語る者として、独りで飛ぶことのほうを好まざるをえない。」³⁸⁾

「二つの和音の不協和。——女性は仕えようと欲し、そこに自らの幸福を感じる。そして、自由精神の持主は仕えられることを欲せず、その点にこそ自分の幸福を感じる。」³⁹⁾

これらの文章からわれわれは、「自由精神の持主」ニーチェが、妹との「あまりに接近」した生活というものによって自由な思想の発露と飛翔が阻害されることを悟り、また、妹の「母親めいた配慮」が「乳」というよりむしろ「胆汁」になりかねないことを見届けた事実を推測することはできないだろうか。それまで奏でられていた「和音」に「不協和音」が忍び寄った事実を、もしかするとニーチェは書き留めたのかもしれない。そして何より、ニーチェはニーチェの本性の真髓ともいえる、「孤独」を欲したのであろう。

一方、エリーザベトの側においても、彼女自身が言及しているように、「兄に依存した自分の生活」、そして、それを「愚かしくもあまりにも鼻にかけ、それに甘えていた」⁴⁰⁾ (1879年9月11日付け兄宛て書簡) これまでの生活に見切りをつけて、つまり、兄の脇役の座を脱して、自分独自の人生設計をうちたてようとさまざまな手探りを始めていた。マルヴィーダ・フォン・マイゼンブーク (本誌前号の第II節参照) にも相談を持ち掛け、彼女の忠告に従って、まず、上流階級の子女の家庭教師をめざしてフランス語の習得に努めた。パリに赴いてフランス語の学習をする腹づもりもあったが、結局はスイスの St. Aubin および Chur に滞在して個人教授を受けることに計画を縮小している。この間の事情について R. Wollkopf は、「エリーザベトが兄の居住地から距離的にあまり遠ざからないことを念頭においていたからである」⁴¹⁾、という見方をしている。それはともかく、この時点においてはニーチェ兄妹がいまだ心情的に「連帯感情」を保持していたことは明らかである。その後故郷ナウムブルクに戻ったエリーザベトは、ニーチェがかつて学んだプフォルタ学院の院長フォルクマンの5人の息子たちの教育に携わった。ちょうどそのような折(1880年5月)、ベルリンにいるベルンハルト・フェルスターから、ドイツ帝国宰相ビスマルクに上訴する反ユダヤ請願(ユダヤ汚染の防衛、東方ユダヤ人移住阻止、マスコミ・株式市場へのユダヤ勢力介入抑止などを要求)のための署名活動を依頼され、自らナウムブルクにおけるヴァーグナー協会の代表者となって、その運動のために奔走した。その後エリーザベトは、「ドイツ精神再生のための壮大な計画」⁴²⁾をもくろむこのフェルスターの固い信念にますます強く衝き動かされ、次第に植民地「新ゲルマーニア」開拓の事業計画に「汲めども尽きぬ一生の課題」を見い出したと確信するようになる。

さて、ニーチェ兄妹が長年の共同の生活を打ち切った前後の頃から、両者の心のうちにはすでに微妙な疎隔の感情が顕在化していくが、その主な原因としては、1)『人間的な』におけるニーチェの反キリスト教理念に対するエリーザベト(および母親フランツィスカ)の深刻な衝撃、2)ヴァーグナー芸術をめぐる二人のあいだの決定的な見解の相違、3)反ユダヤ主義共鳴に傾いていく妹に対するニーチェの疑念、4)自己の内部に巨大な思想展開の高揚感を覚え、ニーチェが「孤独」を求めたこと(身の回りの世話は、妹に代わって家政婦を雇うことで都合をつけた)、などが考えられるであろう。さらにそれに加えて、その後ニーチェが直截的な言葉で妹に対する嫌悪感を表明するようになった直接的・感情的な契機として、5)いわゆる「ルー事件」(Lou-Affäre)を見落とすわけにはいかない。

本誌前号(第66号)に記したように、ニーチェは18歳のとき、小柄で愛らし

い音楽好きの少女アンナ・レットに淡い初恋を体験したあと、大学生のときに人気女優ヘートヴィヒ・ラーベに唐突な恋文を送り届けたり、31歳のときマティルデ・トランペダハに本気で結婚を申し込んだり、また、その他の女性たちとの種々の曲折もあったが、彼の優柔不断な態度とどこにも恋の作法により、その男女関係の成り行きはいずれの場合も功を奏することはなかった。今やニーチェ（37歳）は定職も捨て、病苦にあえぎながら各地を転々とする身の上にあり、一時その気になっていた結婚への願望もほぼ断念していたかにみえたが、1882年の4月、そのような彼の元に、ローマ滞在中のマイゼンブーク女史から、知性豊かな一人の女性を紹介したい旨の連絡が届いた。女史からの手紙には、チューリヒ大学で学んだそのペテルスブルク出身のルー・ザーロメ（21歳）は、ニーチェの弟子として理想的な人物であるとの言葉が添えられていた。この時期のニーチェは、自分がようやく深遠な命題と向かい合う暁を迎えつつあることを意識しており（その前年の、1881年に刊行された『曙光』という著書の表題には、そういう意味合いが込められている）、ぜひ自分の思想を受け継いでくれる弟子が欲しいと念じていた。

1882年4月下旬ローマで、マルヴィーダ・フォン・マイゼンブークおよびニーチェの友人パウル・レーの引き合わせにより、ニーチェとルーは初めて顔を合わせた。ニーチェはそのうら若い才色兼備のルーにすっかり魂を奪われた。例によってニーチェは、後先考えずに友人レーを介して（レー自身がすでにルーに結婚を申し込んで断られていた事実を知らないまま）、ルーに結婚を申し込むが、丁重に断られた。ルー本人の願望はと言えば、大学都市のパリかウィーンで、ニーチェならびにレーと共に「三位一体」（Dreieinigkeit）の共同の学究生活を始めることにあった。ところでニーチェは、たまたまルーと二人で山頂まで登ったモンテ・サクロの丘で体験した「わが人生のうちで最もうっとりする夢見心地」⁴³⁾（ニーチェの言葉）をそのままに、拒絶されてから2週間後に再び、ルツェルンの公園でルーに求婚した。このときもルーは、「二位一体」（Zweieinigkeit）というのは学究の道においてだけ許されることだと述べて、ニーチェの申し出を断った。それにもかかわらず、ニーチェはその後ルーに対する想いをこめて、求愛の手紙を認めた。^{したた}「私はぜひ早くあなたと一緒に何か共同作業をしたり、研究もしたいと思っています。（中略）あなたもご存じのとおり、私はあなたの教師、学問的創造の手助けをする道案内人となることを望んでいます。」⁴⁴⁾（6月18日付け）。「私はただ一人で生きていこうと思っていたのです。——ところがそこへルーという愛しい鳥が飛来したのです。私はその鳥はきっと驚に違いないと思いました。今や私はその驚を自分の傍に置いておきたいと考えたのです。」⁴⁵⁾（8月4日付け）。——ちなみに、この「驚」のイメー

ジは、ニーチェがこの頃すでに構想を練っていた『ツァラトゥストラはこう語った』におけるツァラトゥストラ（ニーチェ自身の自画像と考えて差し支えない）の従者の「驚」に通ずるものであるに違いない。

ニーチェはルーを知って一時期すっかり有頂天になっていた。オーヴァベックに宛てて、「ルーは僕にとってまさに掘り出し物だ。……二人の人間が、われわれ以上に気が合うなどということはめったにないであろう」と書き、またマイゼンブークに宛てて、「あの娘ルーは、いま私と固い友情で結ばれています。（中略）私はルーを弟子にしたいと思っています。私のこれまでの長い人生で、このようなことはかつてありませんでした。私はこの人をぜひ弟子として、思想上の後継者にしたいと思っています」⁴⁶⁾（推定、7月13日付け）、と伝えている。しかし、この「固い友情で結ばれている」というのは、あくまでもニーチェの思い込み、ないしは一方的な期待感にすぎず、ルーのほうはニーチェという人物を極めて冷静に観察し、次のような捉え方をしている。「私たち二人は、本性のどこか秘めた奥深い所で、互いに遥かに遠い別世界に住んでいます。——ニーチェという人には、まるで古城みたいに数々の暗い地下牢や秘密の地下蔵があって、少し知り合っただけでは認めがたいのですが、しかしそこにこそあの人の本性が潜んでいるのかもしれませんが。」⁴⁷⁾（パウル・レー宛ての8月14日付けの日記）。ルーはそれから十数年のちに（1894年）、『フリードリヒ・ニーチェ——人と作品』を公にした。この著書は、ニーチェ研究文献としては最も早い時期に属する出版であるが、現在においてもなおその価値を減じていない。

さてニーチェはその年の8月初旬から3週間、ルーと二人だけの共同学習の機会をつくることに成功した。チューリンゲンの森の保養地タウテンブルクで、彼らはひねもす読書や議論などに明け暮れて、意義ある日々を過ごした。ルーがパウル・レー宛てに書いた8月14日の日記によれば、「今日はニーチェと二人っきりで、静かなほの暗い松林の木漏れ日を浴びながらリスと一緒に素晴らしい一日を過ごしました。エリーザベトは知り合いの人とドルンブルクへ出かけました。（中略）ニーチェとはとても楽しいおしゃべりを交わしています。（中略）でも、特に魅力を感じるのは、同じ思想、同じ感受性、同じ理念の出会いです。ほとんど一言半句で理解し合えるのです。あるときニーチェはそれに驚いて、〈僕たち二人のあいだの唯一の違いといえば、それは年齢の差だけのようだ。僕たちはこれまで同じように生き、同じように考えてきたのだね〉、と申しました。」⁴⁸⁾ところが、このとき兄に依頼されて「付き添い婦人」（Anstands-dame）の役を果たしたエリーザベトが、ルーとのあいだに陰悪な事態を招くことになった。二人の女性のあいだでは、互いに大声でなじり合う激しい対決劇が演じられた。そもそも、それに先立つ数週間前のバイロイト祝祭劇の折に、

ルーが、ニーチェとレーに荷車を引かせ自分が鎮座している例の「三位一体」の写真を誰彼となく見せて、ニーチェとその哲学を茶化している様子を見て、エリーザベトは心の底から憤りを感じていた。それにもまして、かつて花形としてもてはやされた自分に取って代わり、いまや若い才媛のルーが注目の的であることに、エリーザベトの嫉妬心は激しく燃えあがったようである。なにしろ、旧来の因習や道徳を無視した自由奔放なルーの振舞いは、「ナウムブルクの美德」とはまったく相容れないもので、エリーザベトはこの「恥知らずな」小娘の魔手から何とかして兄を救い出さなければならない、と考えた。エリーザベトは賛同を得ようとして、ニーチェの親しい知人たち——ペーター・ガスト、マルヴィーダ・フォン・マイゼンブーク、オーヴァベック夫妻などに宛てて、ルーという「なんとしても抹殺すべき毒虫」⁴⁹⁾ (マイゼンブーク宛のエリーザベトの書簡より) に対して、ありったけの罵詈雑言を連ねた手紙を送り付けた。

一方ニーチェは、8月末のタウテンブルクでの別れの際にルーから自作の詩『生への祈り』を贈られて感激し——ニーチェはそれを愛の証と理解した⁵⁰⁾——、早速その詩に作曲して「ルーとの一体感」に酔い痴れたが、結局これがニーチェとルーの心の通いの頂点であったかもしれない。親友のオーヴァベックにニーチェは次のように打ち明けている。「この夏に僕が体験した最も意義あること、それはルーとの対話であった。僕たちの知性と嗜好とは極めて深いところで血がつながっていた。」⁵¹⁾ (9月9日付け)。しかし、ニーチェはその同じ手紙の後半部に、ルーとエリーザベトのあいだの陰悪な事態について書いている。「残念なことに、僕の妹はルーの不倶戴天の仇敵となってしまった。(中略) 何しろナウムブルクの〈美德〉が僕に向かって齒をむいて、僕たち兄妹の間柄はほんとうに決裂してしまったのだ。」また、妹に加えて、旧来の美德と因習を重んじる敬虔な母親のフランツィスカも、息子がイタリアから情婦を連れて来て同衾しているなどというあらぬ世評を耳にして激怒し、「父親の墓に泥を塗る破廉恥」⁵²⁾ と決めつける始末であった。10月初めにニーチェはライプツィヒでルーとレーに会うが、これがルーと顔を合わせる最後の機会となった。ルーの心がすでに自分から離れてしまっていることを知ったニーチェは、絶望の淵に追いこまれて自殺の意向さえほのめかした。しかも、ニーチェにとって「家族の者との感情的な紛争は、殊のほか大きな精神的負担」⁵³⁾ となった。ニーチェはちょうどこの頃に執筆したと考えられる遺稿のなかに、自らの心中の苦悶を次のように書いている。

「母や妹のようなタイプの人間が、私にとって紛れもない敵対者であることは、とっくに承知している——(中略) あのような人間のもとにいと、私に必要な空気が台無しになってしまう。しかるに、私には多くの自己克服が必要で

ある。』⁵⁴⁾ またニーチェは、パウル・レーに宛てた書簡においても、ついに堪忍袋の緒が切れたことを次のように告げている。「そうこうするうちに、僕の妹はその生来の敵意を（中略）全力をあげて僕に向けてきて、はっきりと僕から離れていった。（中略）妹は僕に面と向かって嘲笑と冷笑を浴びせかけたのだ——実のところを言えば、僕は妹に対してこれまでずっと、およそ女性という種属に対しては当然のことなのだが、あくまで忍耐強く、寛大な気持ちを持ち続けていたのだが。』⁵⁵⁾（推定、1882年9月15日付け）。さらに、妹宛ての書簡草稿には、「哀れな妹よ、僕はおまえの持っているような心根は嫌いだ。おまえの心根がいまだに道徳的なおごりで踏んぞり返っているのが一番いやだ」⁵⁶⁾（推定、同年9月）と書き、また、オーヴァベック宛ての書簡のなかでも、「僕は、妹の声を聞くと胸くそが悪くなる」⁵⁷⁾（1883年3月6日付け）、と書いている。

これに対し、妹エリーザベトのほうでも、反キリスト教理念という兄の「恥知らずな」思想展開に衝撃を受け、加えて兄のヴァーグナーとの決別、兄が表明するフェルスターの信念への嫌悪感などは断じて許しがたいことであった。1883年4月4日付けの母親宛てのエリーザベト書簡には、兄に対する彼女の不信感と、そして同時に、いわば兄の対蹠像ともいえる恋人フェルスターの姿を理想化している。「反キリスト者などと！私は身の毛がよだつ思いです。私はすっかり絶望してしまいました。兄さんの見解がそもそも誰かのためになるのか、と疑問に思われてなりません。母上、せめてフリッツが、あのフェルスターと同様の見解を抱いてくれたらいいのにとします。なにしろあの人には、私たちがもっと善人になり幸せになるための促しと、それに従わせる理想というものがありますから。』⁵⁸⁾（1883年4月4日付け）。また、同年9月15日付けのベルンハルト・フェルスターに宛てた手紙にも、エリーザベトはニーチェ哲学に対する拒否の姿勢を明らかにしている。「兄の目標は、私の目標ではありません。言うならば、兄の哲学全体が私の性に合わないのです。それに対して私は、ある種の抵抗を覚えるのです。』⁵⁹⁾

その後、ニーチェ兄妹はマイゼンブークの仲裁もあって一時和解するのだが（ニーチェは1883年4月27日付けの妹宛て書簡のなかで、「愛する妹よ。（中略）おまえが僕に向かってもはや戦争をしかけてこないことが、僕はとても嬉しい」⁶⁰⁾、と書いている）、しかしやがてまた対立を深め、そして再び1884年9月に和解している。兄妹としての感情の通いは保ちながらも、その後二人の間柄は疎遠になり、何かととげとげしい言葉の応酬が顕著になってくる。エリーザベトがますます兄の思想圏から遙かに離反し、彼女自身の表現によれば、「兄の世話とは次元を異にした使命を求め、遠い世界に赴いて、兄と自分とのあいだに大洋を隔て置く計画」⁶¹⁾に、自ら積極的に身を乗り出すからである。

* * *

* * *

さて、そのような展開の傍ら、エリーザベトはちょうどその「ルー事件」の年である1882年⁶²⁾に、自立の道を探る一つの手立てとして、文筆活動における自分の力量を試そうと、小説の執筆に挑戦している。ちなみに、エリーザベトが短編小説を書いたことは知られていたものの、その小説遺稿の原稿については従来その存在が確認できなかったが、先年ようやくワイマールのゲーテ・シラー資料館において発見され、Roswitha Wollkopf が „Nietzscheforschung, Bd.1“ (1994年)において、このエリーザベトの「未発見原稿」に関する論文を発表し、ニーチェ研究者たちの関心を引いた。そして、昨年(2001年8月)、Carol Dietheによって初めてその全文が公表された⁶³⁾。この短編小説それ自体は、決して文学的価値を云々できるレベルのものではないが、本稿のテーマに沿ってニーチェ兄妹の関係、特にエリーザベトの兄に対する深層心理を伺い知るうえで興味をそそられる一面がある。なお、エリーザベトのその125枚の原稿にはタイトルが欠けているが、Dietheは小説内容に照らして、„Kaffeeklatsch über Nora“ (ノラをめぐる茶飲み話) という仮題を付けている。

この小説の舞台は Weissenburg である。これは Naumburg の隣町である Weissenfels の Weissen-と Naumburg の-burg が合体された架空の地名であることは、すぐに判断がつく。主な登場人物としては、30歳を越えた独身の哲学者で大学教授の Georg Eichstedt (ニーチェを想わせる) を中心に、Nora Werner (エリーザベトを想わせる)、Julie von Ramstein (ルー・ザーロメを想わせる)、Georg の父親の陸軍大佐、Georg の育ての親である伯母の Linchen、パウル・レーを想わせる Georg の友人などである。Julie は、エリーザベトの目から見てルーそっくりに「才気走ったいやらしさ」をもつ「自由思想家の女」として設定され、一方、エリーザベトをほうふつとさせる30歳の未婚の女性 Nora は、自己形成のために学術書をひもとく学問志向者として描かれている。(ただし、イプセンの『人形の家』の主人公と同じ名を持ちながら、直接的なかたちで女性解放の闘いに関わり合っているわけではない。) むろん、「ルー事件」と同じく、「男を引きつける見事な手際」を持つ「危険極まりない女」と評される Julie と、そして Nora とは Georg をはさんで仇敵の関係にある。Nora の母親は、エリーザベトの母親フランツィスカと同じく、娘が早く結婚してくれることを切望しているが、Nora にはその気がなく、むしろカントを読んでいるほうが楽しいと考えている。Georg は学問の世界に没頭していて、Nora の美しさにさえ気付かないほどであったが、やがて自分の感情に促されて Nora に激しく愛の告白をする。Georg は教授職まで投げうって、Nora との素朴で牧歌的な結婚生活を決意する。森の静寂のなかで恋する二人が抱擁する arkadisch な

場面で、この小説は閉じられている。

自分の身の人物像を暗示するようなこの小説は、虚構世界にしてはあまりにも想像力を事欠き、また、GeorgとNoraの結婚という事態は、勘繰って考えれば兄妹婚というおぞましい近親相姦の幻想をもにおわせており、いかにも悪趣味にすぎるであろう。

ニーチェはどうやら妹のこの短編小説を手紙を通じて酷評したようで（そのニーチェ書簡はエリーザベトの手によって破棄されたとみられ、残存しない）、エリーザベトはいたく自尊心を傷つけられ、その後は二度と小説執筆を試みることはなかった。ただ、周知のごとく、「ニーチェ資料館」を設置して「ニーチェ運動」に邁進するようになってからのエリーザベトは、浩瀚な『ニーチェ評伝』やニーチェに関する数冊の著書、雑誌論文など活発な文筆活動を続け、それらの執筆内容の個々の問題点を度外視すれば、いずれにせよ文筆家としての卓越した才能を発揮した。なお、皮肉なことであるが、エリーザベトが偽造、変造したとされるニーチェ書簡は、その筆致じたいがニーチェのそれと極めて酷似しており、並みの著述家には及びがたいほどの出来ばえであることも、付記しておかなければならない。

4) ニーチェの「女性論」——その暗示性

ニーチェは「ルー事件」が収束したあとも、ルー礼賛と、そしてそれとはちょうど対照的に、妹に対する「道義的憤怒」⁶⁴⁾ (moralische Entrüstung) を数多く綴っている。「私が知り合った知己のうちで、私に最も価値があり最も収穫が多かったものの一つが、ルーとの交遊なのだ。あの交遊のあと私は初めて成熟し、わがツァラトウストラに至った。ところが、おまへのせいで私はこの交わりの期間を短縮せざるをえなかった。(中略)ルーは、考えられる限りにおいて最も才能豊かな、最も熟考型の人間だ。」⁶⁵⁾ (妹宛てのニーチェ書簡草稿、1884年1～2月)。

ニーチェにとって、ルーを敵にまわした妹の言動は、ニーチェの言葉を借りるならば⁶⁶⁾、「まったく厚顔な愚行」であり、「恥知らずの無礼千万」以外のなにものでもなかった。ルーとの友情・恋情を破綻に導いた責任はすべて、妹の出すぎた介入にあると考えたニーチェは、先述のとおり、妹に対するかつてないほどの激しい憤怒の情を露にした。オーヴァベック宛ての手紙においても、ニーチェは自分のやりきれない思いを直截に吐露している。「……僕はほんとうに妹を憎んだのだ。(中略)僕のほうから妹に復讐をすとか罰を科するなどということが絶対にないように心がけてきたのに、結局のところ僕のほうが、妹の情け容赦のない仕返し根性の犠牲者となってしまった。この胸中の葛藤は、僕を

少しずつ精神錯乱へ近づけている。』⁶⁷⁾(1883年8月26日付け)。同様に、母親宛ての書簡草稿においても、自分が虐待動物にされていることを訴えている。「私はここ2、3年というもの、いじめ殺されかけている獣のように、妹に対してわが身を守り、逃げ回ってきました。私は妹に、そっとしておいてくれるように嘆願したのですが、妹は私を責め苛むことを一瞬たりとも止めませんでした。(中略)このような卑劣なやつと血縁であることに、私は嘔吐感を覚えています。妹のこのような忌まわしい獣性は、いったいどこに由来するのでしょうか。』⁶⁸⁾(1884年1月～2月)。

ルー事件後も、ニーチェの妹に対する悲憤慷慨は収まるどころか、いよいよ増幅されているかにみえる。いま少し、引用を続けてみよう。

「あの忌々しい反ユダヤ主義かぶれは、僕の経済的独立、僕の弟子と新しい友人、そして世に与える影響などの僕の目論見を、何もかもご破算にしてしまう。(中略)あれこそが、僕と妹とのあいだの完全な破局の原因なのだ。』⁶⁹⁾(オーヴァベック宛て、1884年4月2日付け)。「妹のやつは、ほんとうに陰険な人間になってしまった。(中略)あんなやつは、とっととパラグアイへ行ってしまえばいい。僕自身は、妹の味方をする者との交際はすべて断つつもりだ。今の僕は、自分の一切の〈中途半端〉に耐えられないのだ。』⁷⁰⁾(オーヴァベック宛て、1884年4月30日付け)。「僕は、家族の者との一件については厄介払いをせざるをえない。——僕はいまや2年間も、よりを戻してなだめてやろうと、お人よしにも最大限の努力をしてきたが、すっかり疲れ果ててしまった。結局は、それも無駄だったのだ。』⁷¹⁾(オーヴァベック宛て、1884年5月21日付け)。「驚いたことに、あの反ユダヤ主義通信にツァラトゥストラの名が出ているのを目にして、僕はついに堪忍袋の緒が切れてしまった。——僕はおまえの夫が所属する一派に対して、いまや正当防衛の態勢を整えている。これらの呪うべき反ユダヤ主義の連中には、決して僕の理想像には手出しさせないぞ。おまえの結婚によって、僕たち兄妹の名前がこの反ユダヤ主義運動と同一視されることに、僕はこれまでどれほど苦悩してきたことか。ここ6年というもの、おまえはすっかり理性と思慮をなくしてしまったね。』⁷²⁾(妹宛て書簡草稿、1887年12月末)。むろんこのようなエキセントリックで激越な言い回しの背後には、ニーチェ特有の誇張的手法が認められ、また、ニーチェ自身が意識して自虐的な⁷³⁾ (selbstquälerisch) 修辞法を弄している点も、われわれは十分に考慮に入れておかなければならないであろう。さらにはまた、ニーチェの場合、そのような「道義的憤怒」が必ずしもエリーザベト個人に向けられるだけではなく、それが普遍化された形で女性一般に対する痛罵や愚弄・冷笑などのアフォリズムを誘う一つの契機となっている局面があることも、決して否定できない事実であろう。

ところで、妹エリーザベトが兄フリードリヒに対してどのような「陰険さ」で執拗に「責め苛んだ」かについては、実のところ必ずしも詳らかではない。その殆どが書簡を通じてであることは明らかであるが、なにしろ、エリーザベトが兄宛てに差し出した書簡の多くが破棄されていて、詳細を検証することが不可能だからである。ちなみに、コッリ／モンティナーリ編の『原典校訂版・ニーチェ書簡集』によれば、「ルー事件」の年である1882年から精神異常をきたす直前の1888年に限ってみても、エリーザベトの „nicht überliefert“ (残存しない) 書簡に対するニーチェの返事は31通の多きにのぼっている⁷⁴⁾。つまり、少なくともその数に匹敵する兄宛てのエリーザベト書簡が、おそらくはエリーザベト自身の手によって破棄されてしまっていると考えられる。ただ、たとえば次のような事実一つからも、妹エリーザベトの出しゃばりと利己的・欺瞞的言動が、ニーチェの繊細な神経を逆なでしたであろうことは、容易に想像がつく。

ニーチェは、自分の思想が世間の反響を呼ばないことを残念に思っていたが、1884年4月初旬、コペンハーゲン大学でゲオルク・ブランデスが行った「ドイツの哲学者フリードリヒ・ニーチェについて」と題する連続講義が好評を博したことを知り、文字どおり欣喜雀躍した。ニーチェはすぐさま、誇らしげにこの事実を知人に誰彼となく伝えている。ところが、この喜びに冷や水を浴びせかけるような便りが、パラグアイの妹から届いた。(同年9月6日付け)。つまり、このブランデス博士がユダヤ人の出自であるという理由だけで、「何くわぬ顔をして、最大の軽蔑の念をこめて」(オーヴァベック宛てニーチェ書簡より)、次のような書簡を送りつけてきた。「私個人としては、兄さんの使徒はできるならブランデス氏ではなく、誰か他の人であればよかったのに、と思います。(中略) ブランデス氏は確かに兄さんを流行の人にしてくれるでしょう。なにしろ、その術を心得ている人ですからね。しかし、私から善意の忠告を一つ申し上げておきます。どうか、個人的にお会いになることはお避けください。』⁷⁵⁾ 妹に対して最大限寛大であろうと努力してきたニーチェも、妹のこのような軽薄で厚顔な態度に怒りを抑えきれず、妹に宛てて次のような書簡を綴った。(ただし、この書簡は投函されないままに終わっている。)これがニーチェが妹宛てに認めた計445通⁷⁶⁾のうちの最後の手紙となった。「おまえの手紙を受け取った。それに何回か目を通したあと、僕は自分がおまえと決別しなければならないという厳粛な必然性に迫られていることが分かった。僕の運命が決定づけられようとしている今、僕は僕宛てのおまえの言葉の一語一語を十倍にも研ぎ澄まされた気持ちで受け止めている。おまえは、数千年の問題に決着をつける人間とその当人の運命に最も近い血縁にあるのだということを、露ほども予感していないのだ。』⁷⁷⁾

さて、ニーチェは書簡文においては、上に示したようなストレートな感情的表現を多く使った。一方、「ルー事件」を契機にして、特に1882年から2、3年間のあいだに、ニーチェは遺稿「遺された断想」や『ツァラトゥストラはこう語った』、『善悪の彼岸』などにおいて、女性・愛・憎しみなどのテーマに関するアフォリズムを集中的に数多く綴った。それらの文は、女性に関する一般論をなぞらえる形をとりながら、実際は妹エリーザベトやルー・ザーロメを念頭に置いて書かれたものであることはまず疑いを入れない、と筆者は推測する。次に引用する数々の箴言が、ルー体験や妹との不和、あるいは、妹とルーの確執などから、いわば帰納的に織り成されていると考えることは、はたして許されないことであろうか。

「男と女を総体的に比較するとき、次のように言うことができる。女はわき役を演じる本能を持たない場合、化粧の天分を持たない。」⁷⁸⁾ ニーチェはタウテンブルクにおけるルーとの共同学習の際に、「付き添い婦人」(Anstands dame)としての「わき役」を妹に託した。しかし、先述のとおりこれが悲惨な結果を招くことになった。／「女たちは自らすべての個人的虚栄心の背後に、相変わらず<女>一般に対する——冷やかな軽蔑の念を持っている。」⁷⁹⁾ ここには、エリーザベトとルーとの確執がほの見えていないか。／「一人の女がある男に攻撃を加えるのは、ある(別の)女から自分の身を守る場合に限られる。男がある女と友情を結ぶと、女は、その男がその女をわがものにできないがゆえにそうするのだ、と考える。」⁸⁰⁾ ニーチェとルーとエリーザベトのあいだに展開された三角関係にも似た愛憎劇がほうふつとするのは、筆者だけであろうか。／「ああ、わが魂よ、どうしておまえは、おまえに溢れんばかりの豊かな情愛を注いでくれた者に対して、それほどまでに非情になったのか！」⁸¹⁾ もしかして妹憎悪に対する、ニーチェ自身の自省の念を読み取ることはできないであろうか。／「……男というものは女が穏やかであることを望むが、——しかし女こそまさに、穏やかな外見をつくらうことにいかに精通しようとも、猫と同じように、本質的に穏やかなものではない。」⁸²⁾ おそらく、ニーチェはエリーザベトの気性の激しさからもルーの果敢なる性格からも、このような「女性観」を引き出すことができたのではないか。／「われわれ二人は、お互いのために有益なものを持っている。このような場合に、議論を戦わすことは何と素晴らしいことか——君は情熱を持ち、僕は(理論的)根拠を持ち合わせている。」⁸³⁾ この場合の「われわれ二人」を、ニーチェとルーと読み替えるとき、このアフォリズムの意味は鮮明になるかもしれない。／「二人の恋人のうち、一人の情熱が頂点を過ぎて下降線をたどると、もう一人の情熱は、本来よりもやや長期間燃えあがる。より長く愛する者のカーブ。」⁸⁴⁾ ここで言う「もう一人」とは、ニーチェ自身の

ことではないのか。ただ、ルーの情熱が頂点まで燃えあがったか否かについては議論の余地があり、多分にニーチェの胸の内の願望にすぎなかったかもしれない。／「自分が愛されていることを知りながら、自らは愛することをしない者は、心の滓を露出することになる。——その一番底に沈殿しているものまで表面化してしまう。」⁸⁵⁾ この後半部は、もしかするとルーに対するニーチェの負け惜しみかもしれない。そういえば、ルー事件のあとマイゼンブークに宛てて(1883年7月中旬)、「レーとルーは、私の靴の底をなめるだけの値打ちもないやつらです!」と、まさに悪態をついている。／「もっとも甘い女でさえ、なお苦い味がする。」⁸⁶⁾ この警句がルー体験のすぐあとに書かれたことを考慮に入れるとき、この「甘い女」の「苦い味」の出所は、おのずと明らかではないだろうか。／「男と女はいったいいつになったら、互いに誤解することを止めるのであろうか? 両者の情熱は、それぞれ違った歩調で歩むのだ——男と女は、時間というものを別々の尺度で測るのだ。」⁸⁷⁾ 「復讐においても、恋愛においても、女は男よりも野蛮である。」⁸⁸⁾ これらの場合の「女」は、エリーザベトとも、ルーとも読めるかもしれない。／「この二人の女たち、過去と未来は今やあまりに騒音をたてるので、現在は彼女たちのもとから遁走する。」⁸⁹⁾ この「過去」と「未来」と「現在」という暗喩は、ニーチェがルー事件後ルーともエリーザベトとも距離を置き、孤独のうちに引きこもって「超人」と「永遠回帰」の思想圏に深く没入したことを考えれば、「現在」こそニーチェその人ではないのか。

「ルー事件」のあった翌年の1883年2月、ベルンハルト・フェルスターはエリーザベトの見送りを受けながら、開拓地の現地調査のため南米パラグアイの地へ旅立った。2年後の1885年3月に彼が帰国したあと、二人はヴァーグナーの誕生日(5月22日)に、結婚式を挙げた。しかし、二人の門出を祝福する気になれなかったニーチェは、あえて口実をつくって欠席した。国粹主義と反ユダヤ主義にかぶれた狂信的な妹ならびに義弟ベルンハルトに、ニーチェは一貫しておぞましい気持ちを抱いていたからである。翌1886年の2月に、フェルスター夫妻は、移住を希望した14家族とともに蒸気船「ウルグアイ号」でヨーロッパをあとにしたが、結局その前年の10月末における面会が、エリーザベトにとって正常な意識をもった兄との最後の別れとなった。

妹の出発直後(1886年2月中旬)、ニーチェは知人のジュネーブ住まいの英国人女性エミリー・フィン宛てに、次のような便りを送っている。「実は私も一人の妹を失くしてしまいました。もちろん、ほんとうの死別ではないのですが、それにも比すべき取り返しのつかない大離別によるものです。妹はいま夫と共に、かの地で植民地を開拓するため南アメリカへ向かっています。(中略)私が、

妹を失くしてしまったという思いに駆られるのは、つまるところ決してそれがパラグアイだからというわけではありません。私の義弟の生きがいである主義主張が、私にとってはパラグアイ以上になじめないのです。』⁹⁰⁾

パラグアイでの生活を始めたエリーザベトは、母親や兄に宛てた手紙においては、現実の過酷な状況についてはその事実を伏せながら、ひたすら良好な局面だけを熱っぽく伝えている。しかしながら、実態はといえば、見込んだ移民家族の増加はままならず、現地の窮状に幻滅した入植者たちの抗議や資金調達の不首尾などによりこの事業はもろくも行き詰まりを見せ、窮地に追い込まれたフェルスターは、入植後3年目の1889年6月、ついに服毒自殺をとげた。亡夫の事業を引き継いだエリーザベトは、債権者やパラグアイ政府との交渉などを一手に引き受け、再建をめざしたが、しょせん破綻への傾斜を食い止めることはできず、その開拓地「新ゲルマーニア」は結局、ある国際的な規模をもった株式会社の手に渡った。それでも、エリーザベトはその再取得を果たそうとして資金集めのキャンペーンを実行するため、1890年の暮ドイツへ一時帰国した。このとき、母親のフランツィスカによって手厚く看護されていた兄フリードリヒと対面するが、いまだ兄の病状回復を信じていたエリーザベトは、もし可能ならば兄をパラグアイへ連れて行こうとも考えたようである⁹¹⁾。帰国中のエリーザベトは、入植者クリングバイルによる現地の窮状暴露本の出版や告訴に対抗し、世間の非難をかわすために、亡夫ベルンハルト・フェルスターを賛美する長詩を発表したり、宣伝キャンペーンの書『パラグアイのベルンハルト・フェルスターの植民地〈新ゲルマーニア〉』を出版したりした。1892年8月にエリーザベトはパラグアイへ戻ったが、植民地経営の再出発はほぼ絶望的であることが判明するに至る。こうして、結局エリーザベトは帰国を決意することになるが、この時点ですでに、彼女の胸の内では次なる「汲めども尽きない一生の課題」が意識されていた。エリーザベト自身の言葉によれば、「(私の)もう一つの大きな人生の課題。私のたった一人の敬愛すべき兄である哲学者ニーチェの面倒をみながら、兄の著作を管理し、また、兄の生涯と思想とを著述するという私の課題が、今後、私の全生涯と全精力を要求する。——従って、植民地の件については、今や見切りをつける必要がある。』⁹²⁾

この固い決意に基づいて、エリーザベトは帰国後早速ナウムブルクの母親の家の一室にささやかな「ニーチェ資料館」を開設した。その3年後の1897年にはワイマールに本格的な資料館を設置し、ここを拠点にして「ニーチェ運動」という一大事業に取り組むことになる。なお、この時点でエリーザベトはこれまでのエリーザベト・フェルスターという自分の名前に、旧姓ニーチェを付け加えて、エリーザベト・フェルスター=ニーチェと名乗る法的な手続きをとっ

た。彼女がこれからめざそうとする目標を、「植民地」から「ニーチェ」へ切り換えた意欲の現われとも見ることができるであろう。

その後のエリーザベトの、「ニーチェ運動」における果敢な活動の経緯については、ニーチェ思想の歪曲という重大な問題点も含め、本稿の本来のテーマから外れる恐れがあるので、割愛することにする。なお、それらの点については拙論『ニーチェにおけるユダヤの問題』（本誌第60号）、『ニーチェ資料館とエリーザベト・フェルスター＝ニーチェ（Ⅰ）』（本誌第62号）、『ニーチェ資料館とエリーザベト・フェルスター＝ニーチェ（Ⅱ）——エリーザベトとルドルフ・シュタイナー』（本誌第63号）、拙訳書（米沢、杉田との共訳）M. Riedel 著『ニーチェ思想の歪曲——受容をめぐる百年のドラマ』（白水社）をご参照願いたい。

5) ニーチェの「女性観」の周辺

本誌前号（第66号）においてトーマス・マンの言葉を引用しつつ言及したように、ニーチェはアフォリズム形式を多用しながら、自らの思想の萌芽を「冷ややかな抽象」としてではなく、実生活におけるさまざまな体験そのものから抽出している場合が少なくない。とりわけ、ニーチェのいわゆる「女性論」にあっては、彼が女性たちとの関わりのなかで苦杯をなめた幾多の個人的経験が、暗示的な言葉の中に包み込まれ、普遍化された形で表現されており、必然的にそれらのアフォリズムはニーチェ固有の辛辣さ、諧謔性、攻撃性を帯びることになる。

「女というか弱い性が、われわれの時代ほど男性側から尊敬して遇されたことはなかった。（中略）女はいまや男を恐れることを忘れつつある。」⁹³⁾

「このように女が新しい権利を獲得し、〈主人〉になろうと努め、女の〈進歩〉をその旗幟に掲げているうちに、実は恐るべき明瞭さでその逆の事態が生じる。つまり、女は退歩してゆくのである。」⁹⁴⁾

「女の心情は表面であり、浅い水辺の波立ち騒ぐ表層なのだ。それに対し、男の心情たるや深い。その奔流は、地底の洞窟でざわめいているのだ。女は、男の力をおぼろげに感じはするが、それを理解することはない。」⁹⁵⁾

「女とは、創造主の七日目ごとのひまつぶしにほかならない。」⁹⁶⁾

「われわれはこれまでご婦人たちに対してあまりにお行儀よくしすぎていた。禍いなるかな、ご婦人たちと交わりうるためには、まず彼女たちの口先を殴らなければならない時代が到来しつつある。」⁹⁷⁾

「おまえは女たちの所へ行くのだね？それなら、鞭を忘れないように！」⁹⁸⁾

ニーチェは『反時代的考察』（1873—6年）の出版を境にして、一貫して時代

文化の批判を自らの使命とした。そしてその批判が鋭利さを極めるに従い、ニーチェの表現形式は次第に攻撃的文体を取るようになった、と考えられる。それは、女性に対する数々の揶揄的な言辞や痛罵的・攻撃的な批判の文章の場合においても、決してその例外ではありえない。ニーチェは、自分の「攻撃的なパトス」⁹⁹⁾ (das aggressive Pathos) について、『この人を見よ』のなかで次のように自己分析をしている。「私の流儀は戦闘的である。攻撃性は私の本能の一つなのだ。」¹⁰⁰⁾ また、次のようにも述べている。「戦闘的な哲学者は、人間に対してだけでなく、問題そのものに対しても決闘を挑むのだ。」¹⁰¹⁾ つまり、ニーチェが、個々の人間の次元——マルヴィーダ・フォン・マイゼンブークにせよ、妹エリーザベトにせよ、ルー・ザーロメにせよ——を超えて、「女性」に関わる万般の遥かな地平線に視線を投げかけていることは、言うまでもないことである。以下においては、ニーチェの「女性観」の来歴とニーチェの反フェミニズムの背景について、略述したい。

そもそもニーチェの「女性論」は、バーゼル大学就任前後の若年の頃にその端緒が認められる。古典文献学研究の一環として、ニーチェは古代ギリシア文化を深く考究し、著書『悲劇の誕生』(1872年)をはじめ、「ギリシアの楽劇」、「ディオニュソス的世界観」「ホメロスと古典文献学」など数々の論文を書き著した。1870年末から翌年4月の時期に書かれた遺稿の一節のなかで、ニーチェはプラトンの『国家』にみられる女性に関する論述に言及しながら、次のような見解を表明している。

「…プラトンは(既存の)結婚さえも廃棄し、その代わりに国家の命令によってお膳立てされた、最も勇敢な男性と最も高貴な女性との厳粛な結婚を構想した。それは、立派な後継者を生み出すことにねらいがある。(中略)国家にとって女性の有する意味とは、人間にとっての眠りと同じである。女性の本質は、消耗し尽くしたものを再び蘇生させる治癒力、中庸を欠いたものすべてに節度を賦与する慈善的静謐、逸脱や過剰との均衡を保つ永遠の不変性である。」¹⁰²⁾ 「古代ギリシアにおいては、女性は国家の最高意志によってあてがわれる地位を占めた。それゆえに彼女たちは、以後二度とみられないような賛美を受けた。ギリシア神話の女神たちこそ、その反映である。ピュティアやシビュラ、それからソクラテスのディオティーマはいずれも巫女であり、彼女たちの口を通して神々の叡智が語り出されるのだ。」¹⁰³⁾

ニーチェの「女性観」の遠近法には、総じてつねにこのような古代ギリシアにおける高雅な女性像が、揺曳している。若い頃にプラトンの『饗宴』や『国家』を熟読反芻したニーチェは、古代ギリシアにおける家父長制を一つの理想的な「家庭観」として受けとめた。ニーチェは、プラトンの女性論をなぞる形

で、国家の不備を「補完する」古代女性の優れた能力を高く評価し、それを「古代女性の最高の勝利」と謳いあげている。

ニーチェは一方、それら古代ギリシアという理想像に照らして近代社会における民主主義、男女同権、ルサンチマン的な「奴隷道德」、キリスト教という「同情の宗教」といった時代趨勢の背後に、「生の凋落を示唆する兆候」¹⁰⁴⁾ (Symptome des absinkenden Lebens) を見て取り、近代文化の脆弱さと「女々しさ」(das Weibische) を、さまざまな著作において多角的に剔抉した。あるときニーチェは妹宛て書簡(1883年11月初め)のなかで、次のように言っている。「この時代において僕に嘔吐感を催させるもの、——それは、名状しがたい虚弱さ、男らしさのなさ、非人格性、変動性、お人好し、要するに〈自我〉追求の脆弱さなのだ。」¹⁰⁵⁾

このような近代批判の基本認識が、あの雄渾で奔放な古代ギリシア文化に対するニーチェの強い憧憬から導き出されたものであることは、たとえば、「古典時代のギリシア文化は、男性の文化なのだ」¹⁰⁶⁾、というニーチェの一文からしてすでに明白である。しかし、ニーチェは文化という次元における動的でディオニュソス的な男性性を高く称揚する一方で、女性という存在に対しても、その静的でアポロ的な不変性、治癒力、自然性などの天性を肯定的に捉えている。「われわれの時代文化の女々しさが、世界観を柔弱化させているのだ。(中略)——国家にとって女性とは夜の謂であり、より正確に言えば眠りなのであり、それに対し男性は目覚めである。女性は見かけ上は無為の徒であるが、つねに一定不変の者であり、治癒力を備えた自然への帰還者にほかならない。」¹⁰⁷⁾ そして、そのあとにさらにこう続けている。「女性の正当なる地位。(中略)女性には子供を産むべく定められており、それゆえに植物として生きるという、人間にとって最高の天職を授けられている。」¹⁰⁸⁾ 子供を産むという「最高の天職」を授けられた女性、つまり、産む性としての女性という観点は、ニーチェの女性観の根底をなしているものの一つであろう。ニーチェは女性論の展開において、つねに生命現象の原点に立ち返りつつ「生の絶対的肯定」(die absolute Lebensbejahung) という理念に基づいて、男女両性間におけるエロス、生殖、強者と弱者などの視点を重要視した。したがってニーチェの場合、結婚ということに関しても、男女間の愛情という局面以上に、子供を産み、家庭を形成することのほうに重点がおかれている。いかにもニーチェ的な辛口の諧謔性に富む箴言を引用しよう。ニーチェは結婚という社会システムをいつも斜視的に、揶揄的に眺めている。「結婚とは、最も欺瞞的で、最も偽善的な種類の男女間の交わりである。それは愛の能力もなく、友情の能力もない者、しかもその無能力について自分の相手をだまし打ちにしたいと思っている者にとっては、たぶん正当

性のあることかもしれない。』¹⁰⁹⁾「恋愛結婚——恋愛で結ばれる結婚（いわゆる恋愛結婚）は誤謬を父とし、切迫（欲望）を母としている。』¹¹⁰⁾

ニーチェの「女性観」の背後に秘められたもう一つの視点は、真理認識という次元に関わる問題であると考えられる。認識するという行為における、果敢な挑戦者の姿を、ニーチェは大胆な「冒険家」、「実験者」、「苛酷さを身につけた者」などになぞらえた。むろん、ニーチェの「力への意志」や「超人」という理念の標語には、認識する者としての激しい情熱にあふれた可能性への意志と、ツァラトゥストラが告知するようなあの超人的な創造意欲の意味合いが含蓄されていることは、言うまでもない。ニーチェが「か弱き性」「女」という表現に託して述べる次のような一節の言外には、おそらくは一般的な意味での「女性」という概念を超えて、むしろ認識や情熱や意欲という次元における脆弱さ、自我の「か弱さ」、翻って言えば、自然な雄々しい本能がタブー視されるデカダンスの症状、安逸な「期待と願望」によって生み出される安直な理想主義、神々さえも虚構する「女々しい」安逸とその危険性などが、含みの多い一つの糾弾として綴られているのではないか。

「くまさしくか弱い性！>（中略）か弱い女は、支えなしには立ってられないと信じ込んで、肉体的であれ精神的であれ、自分の周囲のものを何でも支えと化してしまう。——女は、それら一切のものをあるがままの姿で見ようとはせず、川を渡る際にすぎる橋の欄干が本当に支えとなり得るか否かを、検証しようとしな。い。（中略）女が依りかかっているのは、いずれにせよ認識から得た力なのではなくて、期待と願望が織り成す虚構的な力なのだ。（中略）女たちは、自らのか弱さから絶えず<神々>さえもひねり出すであろう。』¹¹¹⁾ 仮にいま、認識する者の男性的で根源的な「力への意志」をディオニュソス的と呼ぶならば、ニーチェが捉えている「生」そのものは、まさに女性的な明澄で静謐なアポロの世界であり、自然そのままの治癒力を備えた不変的「永遠回帰」の世界である。それゆえに、ニーチェにおいては、生命現象それ自体が、次に示すように、一個の「女性」の形姿に置き換えられている。「生とは女性なり（Vita femina）。（中略）私はこう言いたいのだ。——世界は美しい事物に満ちている。にもかかわらず、それらの事物の美しき瞬間が顕現する機会は、極めて乏しい。おそらくしかし、これこそが生の最大の魅力なのだ。生というものの上には、金糸織りの華麗な可能性というヴェールがかけられているのだ。（中略）そうだ、生とは一個の女性なのだ。』¹¹²⁾ ここにおいては、生というイメージと女性というイメージが重ね合わされて考えられており、その両者は、無限の魅力と可能性を秘めた存在として呈示されている。女性に関するこのような広角的な視点を考え合わせるとき、われわれはニーチェの「女性観」を一口に、女性侮蔑の思想・

反フェミニズムの思想と断じることとはできないであろう。本誌前号（第66号）に引用した『人間的な』の女性賛歌の一節を、いまここで再録してみよう。「われわれは突如としてこう信じる。この世のどこかに、気高く雄々しい王者のような魂をもった女性、しかも彼女たちの裡において男性のもつ最善のものが、性差を超えてまぎれもない理想像と化しているがゆえに、堂々たる応酬や決断や犠牲的行為をやりとおせる女性、従ってまた、男性たちをも支配する能力と覚悟を備えた女性が、現に存在しうるのだということを。」¹¹³⁾

ニーチェには、固有の理想的な女性像があった。しかし、その理想像は必ずしも社会分析的な女性史的観点から抽出された現実的女性像とは言いがたく、あくまで生命現象に即した女性という性の顕現（ないしは芸術的顕現）の暗喩であった。そのような女性の顕現に対して、ニーチェは少なくとも懐疑的・否定的であったためしはない。そのように考えるとき、ニーチェの思想の真諦に世に言う反フェミニズムという女性蔑視の理念が打ち出されているという見解には、少なからぬ疑義が残ると言っても過言ではないであろう。その点については、Hans Vaihinger がすでに早い時期にその著『哲学者としてのニーチェ』（1916年）において、次のような指摘をしている。「……ニーチェの言動のなかに、女性に対する粗暴な攻撃を見届けようとするのは、誤りであろう。ショーペンハウアーの場合とは異なり、（中略）ニーチェは、人間の自然的な差異性を恣意的に無視しようとする企てにこそ異を唱えるのである。文化というものは、必ずや自然と連動すべきものであり、それを継承すべきものであるからだ。」¹¹⁴⁾

ニーチェにおける「女性」や「脱女性化」（Entweiblichkeit）という言葉や理念の背後には、すでに述べてきたように、日常的体験から得られた女性に対する寸評的・駄洒落的な次元から、「生殖」や「国家」、「生」や「認識」の問題の次元、そして、ニーチェのいわばライフワークとも言える近代文化批判、ひいては、ニーチェ哲学の根幹をなす「力への意志」、「超人」、「永遠回帰」などの思念的符牒の範疇に至るまで、実に多極的な暗喩空間が広がりを見せている。ニーチェの女性観を、ただ単に反フェミニズムの見解と直結したり、ましてや、安易にニーチェにおける Misogynie（女性嫌い、女性嫌忌症）を云々したりすることは、それ自体決してニーチェの「女性論」に対応する正当な方法論とは言いがたいと考える。

注

- 1) Peters, Heinz Frederick : *Zarathustras Schwester. Fritz und Lieschen Nietzsche — ein deutsches Trauerspiel*, München (Kindler Verlag, 1983), S.13
- 2) Nietzsche, Friedrich : *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe in 15 Einzelbänden*. Hrsg. von Colli, G. / Montinari, M., München (dtv / de Gruyter, 1988) [KSA と略す], KSA6, S. 268
- 3) Diethe, Carol : *Nietzsches Schwester und Der Wille zur Macht—Biografie der Elisabeth Förster-Nietzsche*, Hamburg / Wien (Europa Verlag, 2001), S.8
- 4) Schlechta, Karl : *Der Fall Nietzsche—Aufsätze und Vorträge*, München (Hanser Verlag, 1959), S.76
- 5) Goch, Klaus : Elisabeth Förster-Nietzsche—Ein biographisches Portrait. In : (Hrsg.) Pusch, Luise F. : *Schwestern berühmter Männer—Zwölf biographische Portraits*, Frankfurt a. M. (Insel Taschenbuch, 1985), S.400
- 6) 1) の上掲書, S.13
- 7) Macintyre, Ben : *Vergessenes Vaterland—Die Spuren der Elisabeth Nietzsche*, Leipzig (Reclam Leipzig, 1994), S.9f.
- 8) 1) の上掲書, S.26
- 9) 3) の上掲書, S.45
- 10) Förster-Nietzsche, Elisabeth : *Der junge Nietzsche*, Leipzig (Kröner Verlag, 1912), S.44
- 11) Hahn, Karl-Heinz : Das Nietzsche-Archiv. In : Behler, E. / Montinari, M. / Müller-Lauter, W. / Wenzel, H. (Hrsg.) : *Nietzsche-Studien—Internationales Jahrbuch für die Nietzsche-Forschung*, Bd. 18, Berlin / New York (de Gruyter, 1989), S.6
- 12) 10) の上掲書, S.44
- 13) 5) の上掲書, S.398
- 14) 10) の上掲書, S.44
- 15) 1) の上掲書, S.26
- 16) 5) の上掲書, S.398
- 17) 1) の上掲書, S.29
- 18) Nietzsche, Friedrich : *Briefwechsel. Kritische Gesamtausgabe in ca. 20 Bänden*. Hrsg. von Colli, G. / Montinari, M., Berlin (de Gruyter, 1975 ff.) [KGB と略す], KGB I 1, S.380
- 19) 1) の上掲書, S.35
- 20) 3) の上掲書, S.52
- 21) KGB I 3, S.274
- 22) 5) の上掲書, S.371

- 23) 3) の上掲書, S.34
- 24) Förster-Nietzsche, Elisabeth : *Friedrich Nietzsche und die Frauen seiner Zeit*, München (Beck'sche Verlagsbuchhandlung, 1935), S.13
- 25) Marelle, Luise : *Die Schwester—Elisabeth Förster-Nietzsche*, Berlin (Brunnen Verlag, 1934), S.68
- 26) 25) の上掲書, S.69
- 27) 3) の上掲書, S.55
- 28) 5) の上掲書, S.373
- 29) Janz, Curt P. : *Friedrich Nietzsche—Biographie*, Bd.1, München / Wien (Hanser Verlag, 1993), S.148
- 30) KGB II5, S.112
- 31) Brann, Henry W. : *Nietzsche und die Frauen*, Bonn (Bouvier, 1978), S.59
- 32) Goch, Klaus (Hrsg. und kommentiert) : *Nietzsche. Über die Frauen*, Frankfurt a. M. und Leipzig (Insel Taschenbuch, 1992), S.141
- 33) Schaefer, Dirk : *Im Namen Nietzsches—Elisabeth Förster-Nietzsche und Lou Andreas-Salomé*, Frankfurt a. M. (Fischer Taschenbuch, 2001), S.20
- 34) 10) の上掲書, S.422
- 35) 1) の上掲書, S.75
- 36) KSA2, S.280
- 37) KSA2, S.281
- 38) KSA2, S.279f.
- 39) KSA2, S.282
- 40) KGB II6-2, S.1162
- 41) Roswita Wollkopf : Elisabeth Nietzsche—Nora wider Willen? Ein bisher unentdecktes Manuskript. In : Gerlach, H.-M. / Eichberg, R. / Schmidt H. J. (Hrsg.) : *Nietzscherforschung—Eine Jahresschrift*, Bd. 1, Berlin (Akademie Verlag, 1994), S.262
- 42) 1) の上掲書, S.64
- 43) Pfeiffer, Ernst (Hrsg.) : *Friedrich Nietzsche / Paul Rée / Lou von Salomé—Die Dokumente ihrer Begegnung*, Frankfurt a. M. (Insel Verlag, 1970), S.183
- 44) KGB III1, S.206
- 45) KGB III1, S.236
- 46) KGB III1, S.223f.
- 47) 43) の上掲書, S.185
- 48) 43) の上掲書, S.181f.
- 49) 43) の上掲書, S.259
- 50) Leis, Mirano : *Frauen um Nietzsche*, Reinbeck bei Hamburg (Rowohlt Taschenbuch, 2000), S.87

- 51) KGB III1, S.255
- 52) KGB III1, S.326
- 53) 3) の上掲書, S.72
- 54) KSA10, S.111
- 55) KGB III1, S.258
- 56) KGB III1, S.267
- 57) KGB III1, S.338f.
- 58) 1) の上掲書, S.110
- 59) 1) の上掲書, S.114
- 60) KGB III1, S.368
- 61) Förster-Nietzsche, Elisabeth : *Der einsame Nietzsche*, Leipzig (Kröner Verlag, 1922), S.256
- 62) 1882年4月23日付けおよび同年5月5日付けの兄宛てのエリーザベト書簡や、同年6月26日付けのルー宛てのニーチェ書簡などから推し量って、このエリーザベトの短編遺稿が1882年に書かれたことはまず間違いない。
- 63) 3) の上掲書, S.229-271
- 64) KGB III1, S.254
- 65) KGB III1, S.467
- 66) KGB III1, S.469f.
- 67) KGB III1, S.437
- 68) KGB III1, S.469f.
- 69) KGB III1, S.493
- 70) KGB III1, S.498
- 71) KGB III1, S.505
- 72) KGB III5, S.218f.
- 73) Bernoulli, Carl Albrecht : *Franz Overbeck und Friedrich Nietzsche—Eine Freundschaft*, Bd. 2, Jana (Diederichs, 1908), S.91
- 74) KGB III1, KGB III3, KGB III5 による統計に基づく。
- 75) KGB III6, S.295
- 76) KGB 全巻に載録されているニーチェのエリーザベト宛て(ただし、エリーザベトと母親フランツィスカ、エリーザベトとベルンハルト・フェルスターとの連名によるものも含む) の全書簡数は合計445通にのぼる。
- 77) KGB III5, S.473
- 78) KSA5, S.98
- 79) KSA5, S.89
- 80) KSA10, S.189
- 81) KSA10, S.569
- 82) KSA5, S.96

- 83) KSA10, S.198
- 84) KSA10, S.84
- 85) KSA5, S.88
- 86) KSA10, S.185
- 87) KSA10, S.620
- 88) KSA5, S.97
- 89) KSA10, S.101
- 90) KGB III3, S.150
- 91) 5) の上掲書, S.386
- 92) Hoffmann, David Marc : *Zur Geschichte des Nietzsche-Archivs—Chronik, Studien und Dokumente*, Berlin / New York (de Gruyter, 1991), S.12
- 93) KSA5, S.175f.
- 94) KSA5, S.176
- 95) KSA4, S.86
- 96) KSA10, S.386
- 97) KSA12, S.45
- 98) KSA4, S.86
- 99) KSA6, S.274
- 100) *ibid.*
- 101) *ibid.*
- 102) KSA7, S.171
- 103) KSA7, S.172
- 104) KSA5, S.403
- 105) KGB III1, S.451
- 106) KSA2, S.213
- 107) KSA7, S.146
- 108) *ibid.*
- 109) KSA10, S.59
- 110) KSA2, S.267
- 111) KSA10, S.39f.
- 112) KSA3, S.568f.
- 113) KSA3, S.428
- 114) Vaihinger, Hans : *Nietzsche als Philosoph*, Berlin (Verlag von Reuther u. Reichard, 1916), S.53f.